

ケンペルの「……国を鎖している日本」論

—志筑忠雄訳「鎖国論」と啓蒙主義ヨーロッパ—

渡 邊 直 樹

はじめに

1690年9月から92年10月までオランダ長崎・出島商館医として日本に滞在したケンペル(Engelbert Kaempfer, 1651-1715)は、帰国後、ラテン語で『廻国奇観』(Amoenitatum exoticarum, 1712)を著す。この中に日本に関する論文Regnum Japoniae optima ratione, ab egressu civium, & exterarum gentium ingressu & communione, clausum(最良の見識によって自国民の出国および外国人の入国、交易を禁じ、国を閉ざしている日本)があった。これが、英語版『日本史』に英訳転載されたことから、そのオランダ語訳から日本に存在が知られる¹。

折から18世紀も終わりのころになると日本近海に外国船が鯨を追って、燃料の補給や通商を求め頻繁にやってくる。こうしたなか、通詞志筑忠雄(1760-1806)が、1801年ケンペルのこの長い題名の論文を「鎖国論」という外題を付し翻訳する。これが写本のかたちで流布し、近代日本の進路に少なからぬ影響を与えることになる²。「鎖国」は、これ以降、歴史用語となり、「鎖国論」は単に言説に過ぎなかったかどうかは別にして、「鎖国」は日本近代史上の重要な概念となる。

一方、18世紀ヨーロッパにおいて「鎖国論」を含む『日本史』は日本観の形成に与って重要な一拠となった。

本稿は、この「鎖国論」が日本とヨーロッパにおいて有した思想的意義を考察したものである。

I 「鎖国論」の読み方 一日本

ケンペル『日本史』(The History of Japan, 1727)の編纂者であるイギリス人シヨイヒツァー(Johann Caspar Scheuchzer, 1702-1729)は、『廻国奇観』から「鎖国論」を含め6論文をこの本の付録

とした。それほどこれらは18世紀ヨーロッパにおいて重要な、あるいは関心をひくテーマであったのであろう³。この編集にはおそらくイギリス王立協会のスローン卿(Sir Hans Sloane, 1660-1753)の意図が大きく反映したに違いない。ケンペルの遺産相続者である甥・ヘルマンから買い取ったケンペルの手稿「今日の日本」を含む日本報告の全体が、卿にとって、ヨーロッパにとって、単なる情報の域を超えて興味ある新奇な分析対象となった。

一方、1773年に再発見されたケンペル手稿を『日本の歴史と紀行』(Die Geschichte und Beschreibung von Japan, 1777-79)として編纂した、いわば再受容したドイツ人啓蒙主義者ドーム(Christian Wilhelm Dohm, 1751-1820)にとっても、これら付録は同様に価値があった。

ヨーロッパから見て極東の日本は、18世紀初め産業革命時代のイギリスにおいて、また、18世紀啓蒙主義時代の大陸において比較対照され、ポジティブにもネガティブにも評価がなされるべき題材であり、経済・社会・政治・哲学を含む思想課題でもあった。

17世紀も終わる頃、日本の長崎出島のオランダ商館医として滞在した医師ケンペルにとって日本に関する興味・分析対象は、オランダ人による独占貿易の実体であり、それを可能にしている日本の歴史・社会システム・政策にあった。この意味で、ケンペルが日本について最も実際の、かつヨーロッパとの比較において記録に留める必要があると考えたことの一つが鎖国であったことは間違いない。ケンペルの五項目からなる「鎖国論」がむしろ日本社会論の一分野として読まれるべき性格をもつ、といつてよい。

ケンペルの日本報告は、遺稿としての「今日の日本」の数奇な運命を離れたところに、日本とヨー

ロッパにおける受容史においてしかるべき位置を占めている。

なお、「鎖国論」は『廻国奇観』第2巻第14章の論文である⁴。ショイヒツァーはもちろんそのラテン語を英語に訳し、ドームはそれをドイツ語に訳し、それぞれ『日本史』と『日本の歴史と紀行』の付録とした。〈スローン・コレクション〉に保管されたケンペル手稿に基づき、ケンペル研究者ボダルト・ベイリー女史(Bodart-Bailey)⁵が1999年に編纂した『ケンペルが見た徳川時代の日本』にも、九州大学教授ミヒエル博士(Wolfgang Michel)が編纂した『ケンペル全集』(2001-03)の「今日の日本」においても、もともと存在しないこれら論文は付加されていない。

ショイヒツァーとスローン卿は「鎖国論」をいかなる意図をもってあえて『日本史』に付加したのか。特異な日本情報であり、これにより、イギリス人のみならずより多くのヨーロッパ人の多様な関心を喚起することに狙いの一つがあったことは確かであろう。一方、ドームはなぜ「鎖国論」を掲載したのみならず、それへの反論である「編者のあとがき」を付したのか。この底辺にはヨーロッパ啓蒙主義の普遍主義がすでに認められる。

「鎖国」を分析し、日本独自の外交政策としてポジティブに評価したケンペルの論理が、18世紀以降の日本近代の歴史と思想において少なからぬ意味をもつものとなったが、両者ともこのことを当時ゆめゆめ思わなかったに違いない。

ヨーロッパ批判としての「鎖国論」

歴史の起源を旧約聖書の創世記に求めるケンペルから見て、神が人類共通の利益を前提して世界を分配したとすれば、互いに協力して社会を開拓し、構築する必要がある。この観点からいうと鎖国は「天理に反し」、確かに不当であった。

ケンペルは、しかし、鎖国を現実に基づいて分析した。切支丹の追放—キリスト教の禁止—貿易相手国の制限—という江戸幕府の一連の禁止令の結果としての鎖国について、ケンペルは妥当性をもつとして是認したのである。

創世記からみると「天理に反する」が、もっぱら日本の宗教史と社会状況とを考慮すれば妥当性があるとのケンペルの实际的「鎖国」擁護論には

矛盾があり、ドームのいう「思い入れ」との批判が確かに当てはまる。

海に取り囲まれている国という地理的条件が、この民族と国家の安寧を導いているとのケンペルの解釈は、フランスやハプスブルク・オーストリア、イギリスやロシアとの勢力均衡の下、宗教的内部分裂の危機を孕んでいた自国、神聖ローマ帝国ドイツ諸領邦にとっていかに例外的かつ理想的に見えたことか。むしろ、ケンペルの洞察は、当時17世紀後半のヨーロッパ人たちの精神的危機を現すと同時に宗教・政治・哲学の分野において、この混乱を克服し、新しい価値観の創造がいかに喫緊の課題であったかを示すものに他ならない。

事実、17世紀後半のヨーロッパは、混乱の克服と新しい時代の息吹を必然的に呼び覚ました。デカルト(René Descartes,1596-1650)、ガリレイ(Galileo Galilei,1564-1642)、ケプラー(Johannes Kepler 1571-1630)、ペール(Pierre Bayle,1647-1706)、ニュートン(Isaac Newton,1642-1727)、ライブニッツ(Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646-1716)ら哲学者・自然科学者らの「知」はアリストテレス・スコラ哲学から神学を解放したばかりでなく、既存の宗教と社会組織からも人間精神の解放を促し、人間理性を判断基準とする合理主義による変革をもたらす。

キリスト教の分裂と争い、国家と法・政治、宗教と神学にかんして、祖国に対するケンペルの危機意識は日本にかんしてその理想像あるいは模範像を思い描いたとしても不思議ではない。日本の「鎖国」評価は同時にヨーロッパの現実批判であった。

18世紀ヨーロッパ啓蒙主義は理性による懐疑と批判精神をもって真理を追究した。例えば、社会契約という考えの内容は様々で違いはあるが、18世紀にこれを主張した多くの思想家たちが一様にヨーロッパの外に出た人たちの旅行記や体験記を蔵書としていたという事実は、彼らが社会矛盾を意識したとき、その解決方法の拠り所をこうしたヨーロッパ以外の地域、ヨーロッパに未知の地に求めていたことを示している。『市民政府二論』(Two Treatises of Government, 1689)を著したロック(John Locke,1632-1704)の蔵書には275点

の旅行記・地誌が含まれ、その中にコロンブス（Cristoforo Colombo, 1451?-1506）の「航海記」やスペイン人コルテス（Hernán Cortés, 1485-1547）の「西インド征服史」、イギリス人ドレイク（Sir Francis Drake, 1543?-1596）の「西インド航海誌」が含まれていた、という。

「……国を鎖している日本」論の系譜

「鎖国」という日本語は通詞である志筑忠雄が、ケンペル論文をオランダ語から翻訳するとき初めて用いた。もとはラテン語であり、ショイヒツァーが英語へ、英語からオランダ語へ、オランダ語から日本語へという系譜をたどる。

ショイヒツァー版『日本史』における英訳は以下の通りである。

An Enquiry, whether it be conducive for the good of the Japanese Empire, to keep it shut up, as it now is, and not to suffer its inhabitants to have any Commerce with foreign nations, either at home or abroad.

「日本にとって、現在のように国を鎖したままでいることが、そして日本人に外国との交渉を国内においても、国外においても禁じていることが有益であるかどうか、の問い」（拙訳）

オランダ語版『日本紀行』における蘭訳とその志筑訳は以下の通りである。

Onderzoek, of het vanbelang is voor't Ryk van Japan om het zelve geflooten te houden, gelyk het nu is, en aan desfelfs Inwooners niet toe te laten Koophandel te dryven met uytheemsche Natien't zy binnen of buyten's Lands.

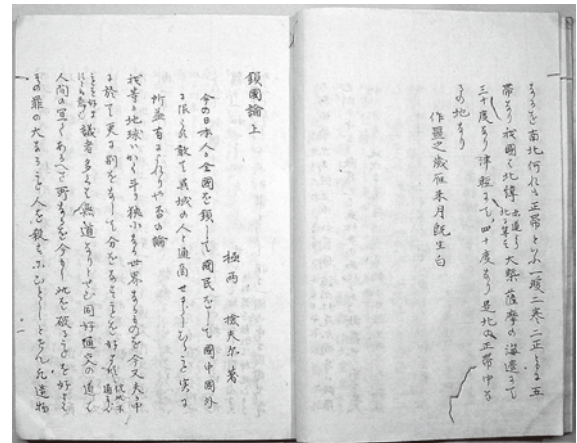
「今の日本人全国を鎖して国中国外に限らすあえて異域の人と通商せざらしむること、実に所益なるに与れりや否やの論」（志筑訳）

因みにドイツ語版ドームのドイツ語訳は以下の通りである。

Beweis, daß im Japanischen Reiche aus sehr guten Gründen den Eingebornen der Ausgang, fremden Nationen der Eingang, und alle Gemeinschaft dieses Landes mit der übrigen Welt untersagt sey.

「日本において日本人には出国が、外国人には入国が、また外国との一切の交流が禁じられている

ことが妥当な理由によるものであることの証明」（拙訳）



（オランダ語訳『日本紀行』1733年からの日本語訳、表題として「鎖国論」とある、少年必読日本文庫、巻之上より）

志筑忠雄は1801年、恐らく平戸藩にあったショイヒツァー英語版のオランダ語訳『日本紀行』第二版（1733）を底本として訳出した⁶。「……国を鎖している日本」論は『廻国奇観』から挿入した付録第6番目にあたる。

そして、この内容を表わす表題を「鎖国論」とした。英語からの蘭訳はさておき、英語訳は読者への「問いかけ」An Enquiryが冒頭にあり、「鎖して」に当たる語はkeep it shut upであろう。志筑の訳とは直接関連はないが、ドイツ語訳は「証明」Beweisという語が冒頭にある。「鎖して」のドイツ語はuntersagt seyであろう。英語訳は客観的、ドイツ語訳は主観的といえはいえるかも知れない。それぞれショイヒツァーとドームの解釈が反映していると見てよい。

こうした両者の『廻国奇観』のラテン語原典からの翻訳のニュアンスの相違について五之治昌比呂氏が詳細に比較考証している。五之治氏によれば、ショイヒツァー訳は「原文からの逸脱が激しく」、一方ドーム訳は「概して原文に忠実」であるが「意図的改変が読み取れる箇所」がある、と指摘する。ドームには「日本や日本人に関する記述にネガティブなニュアンスを付け加えようとする意図」があったのではないかと、換言すれば、ケンペルの鎖国肯定論を認知したくなかったのではないかと、という見方を五之治氏は示している⁷。

ところで、果たして1801年当時の日本人にいわゆる「国を鎖して」いるという意識があったの

であろうか。むしろ、諸外国との交渉を「鎖して」いる外交政策は、それを有益と捉えたケンペルと有害と捉えたドームらによって初めて日本人の意識にのぼった、いわば逆輸入の概念ではなかったか。なぜならば、少なくとも江戸幕府日本は、ヨーロッパとはオランダと東アジアでは中国、朝鮮と交易関係は維持しており、また、世界情勢や医学、科学に係る情報・知見はそれなりに獲得できていたからである。ともあれ、志筑のこの翻訳をもって、日本の歴史に「鎖国」の用語が定着する。

この志筑の、いわゆる「鎖国論」は上梓されることはなかったが、転写され写本というかたちで一部知識階層に、一部幕閣に浸透していった。写本が40種もあったという。「鎖国論」情報の「読み方」、「読まれ方」へ大いに興味が喚起される現象であった。

この後、およそ50年の時を隔て、黒澤翁くろさわおきなまろがこれを『異人恐怖伝』と改題して嘉永三年三月(1850)に出版しようとしたが、幕府がこれを禁じた。解説には「長崎の訳語家志筑忠雄が翻訳したもの⁸⁾とある。志筑が「鎖国論」と訳出したが、黒澤の考えによれば『異人恐怖伝』と改題した方がより適切である、との判断である。というのも、黒澤は本居宣長の神の道に心酔した国粹主義者であったからであり、この時代すでに、攘夷か開国かの議論がそれぞれの利害関係者のもとで現実に行われていた可能性をうかがわせる。

ケンペル「鎖国論」概要

ともあれ、ケンペル鎖国論五項目の要点を簡潔に紹介しよう。

一 私はこの場合、小さな世界に鎖じこもり、隣接諸国と交流せず、世界のどこの国にも煩わされずに安穩に生活し、極めて明るい自制と快楽に明け暮れしている日本人を例にとり、これに倣えばと言っているのである⁹⁾。

二 この国は一つの島だけでなく、大ブリテンと同じように、狭い海峡によって相隔てられている数島より成る極東の島国である。この国は堅牢な天然の要害に囲まれ、しかも周辺の海が到る所、航海者が手を焼く難所だらけなので、難

攻不落の地の利を占めている¹⁰⁾。

三 日本人の言を以てすれば大聖孔子(こうし Koo,Koos)、すなはち孔夫子(Konfucius)が伝えた天来の哲学を以て唯一の道德なりとし、この教えさえあればそれで十分だと考えているのである。ギリシアのソクラテスはこれよりも一世紀おそく、天の声を受けて、孔子と同じような人間の道を説いたといわれている¹¹⁾。

四 これがこの国の政治形式にも風土にも照らして、国民の幸福のため、幕府の安全のために、どうしても必要であるということになり、將軍は老中と図って、永久に拘束力を有し、子々孫々に至るまで何人も犯してはならぬ掟として「日本は門戸を鎖すべきである」という方針を打ち出したのであった¹²⁾。

五 日本国民が現在の境遇と昔の自由な時代とを比較してみた場合、あるいは祖国の歴史の太古を顧みした場合、一人の君主の此至高の意志によって統御され、海外の全世界との交通を一切断ち切って完全な閉鎖状態に置かれている現在ほど、国民の幸福がよりよく実現されている時代を見出すことは困難であろう¹³⁾。

志筑の植民地論

志筑忠雄はケンペルの論文を「鎖国」という簡潔な用語をもって日本に紹介したが、1801年の時点においては、志筑の訳語は適切であったのではなかろうか。「鎖国」とはこの時代のヨーロッパの帝国主義・植民地主義の展開を視座にいたした志筑なりの日本の外交・国防戦略の要として考えぬかれた訳語であった。つまり、志筑は「外を禦ふせぎぎ内を親しむ」鎖国派であった。

是故に国家當時の形勢の求る處、近き頃より一定しつる治綱の求る處、国民享福安養の求る處、土地の性の求る處、ケイヅル(將軍)安全の求る處、悉皆一切に國を鎖して、全く異國人異國風を除くにあり、是故を以てケイヅル及び執政家等、一決してを立て曰く、國當に鎖閉すべし。

凡異国人の中に在て、大に日本に固膠して、これが害をなすの甚しきものは、波爾杜瓦爾人にしくはなしとす¹⁴。

志筑は、ポルトガル人の蛮行を国を「鎖すべき」理由としてあえて訳出している。彼らが「人間を植える、人間を別の土地に送り、そこに住まわせる慣習」について、最終的には全国民を「移植された臣民」とする、と志筑は警告している。日本人の思考にはそれまでなかった「鎖国」の概念とともに、「植民」の概念について言及していることは注目してよい。志筑はヨーロッパの現実と歴史をよく理解していた。

一方、平和な江戸元禄時代に日本に滞在したケンペルから見ると、日本は内から「国を閉ざす」ことにより外圧と国防政策上の危機の存在を巧みに回避し、発展と平和を維持できた。

ケンペルの日本観察が、19世紀中葉に世界における日本の相対的地位という観点から重要さをいや増すのである。アメリカ人ペリー提督がケンペルの著作を座右に幕府と交渉したというからには、おそらくケンペルが報告した鎖国の思想が日本の港の開放交渉に際して何らかのキーポイントとなったのであろう。上智大学で教鞭をとったこともある、ボン大学のツェルナー (Reinhard Zöllner) 教授は、志筑が日本の外交政策を時代の歴史的事実を踏まえ「鎖国」という的確なことばをもって言い当てたことを顧慮し、日本を開国へと導いたのはペリーではなく、「むしろケンペルであった¹⁵」と述べていることは「鎖国」が単なる言説ではなかったとの解釈であろうか。

志筑忠雄とは

「国を鎖ざす」と訳出した通詞志筑忠雄とはいかなる人物であったのか。志筑孫次郎の養子として阿蘭陀通詞志筑本家八代を継ぎ、安永五年(1776)には教師である稽古通詞となるが、病弱であつたらしく早々に職を退き、天文・物理学書や地理・旅行記などオランダ書の翻訳を進めた。通詞はいわば家業であつた。

志筑は1782年に「萬國管闕^{ばんこくかんき}」を著わすが、その内容はドイツ人のゴットフリート (Johann Ludwig Gottfried 1584-1633) 編による『傑作

精選東西インド海陸旅行記』のオランダ語版 (Naaukeurige versameling der gedenkwaardigste zee- en landreijzen, na Oost en West-Indiën, Pieter van der Aa, Leiden, 1706-1707) が種本であり、多くの引用や文献紹介が付されていた。この意味で、志筑は現実の世界情勢や文化事情にかなり精通しており、この時期の世界における日本の立ち位置を十分認識できた。

また、「天文管見」(天明二年・1782)ではニュートンの引力を紹介し、「曆象新書」(享和三年・1803)では当時イギリスオックスフォード大学のキール (John Keil, 1671-1721) の天文学であるカント・ラプラスの太陽系生成論「星雲説」(Kant-Laplace nebular hypothesis)に通じるなど、西欧の科学的思考形式やその応用実践である機械技術の進歩についても熟知していたと思われる。さらにヨーロッパの産業革命による帝国主義と植民地主義も視野に入っていたことであろう。

志筑はこうした世界認識と科学知識とを踏まえ日本の国状を考慮し、ケンペルの「鎖国論」をアクチュアルな課題と認識し、翻訳を思いついたことは十分あり得る。「今の日本人全国を鎖すこと」が「……益なるに与れりや否や」が、約50年後幕府対薩長連合、佐幕派對勤王派の争いの中で日本の進路決定に際しての思慮の一根拠となったことは確かである。

鎖国政策の歴史

徳川幕府は寛永八年(1631)六月から伴天連追放・海外往来禁止・貿易取締を徹底・強化し、寛永一〇年、一一年、一二年に法令を出し、一三年(1636)五月には一九条の「定」を以て日本人の海外渡航および帰国、日本船の海外往来を全面的に禁止するに至る。最終的には寛永一六年の「法令」を以て切支丹禁止を徹底した。ここには禁教政策の妨げともなっていたポルトガル系混血児とその母、養父母の追放が含まれていた。

〈令〉

- 一 異国へ日本の船遣し候儀、堅く停止の事。
- 一 日本人異国へ遣す可からず候条、忍候て乗渡る者之有るに於ては、其身は死罪、其船共留め置き、言上す可き事。

一 異国え渡、住宅仕る日本人来り候はば、
死罪申し付けらる可き事¹⁶。

徳川幕府は国内外のキリスト教徒の追放を決定し、その後「島原の乱」の鎮圧とともに外国船の来港を完全に禁じた。つまり、秀吉以来50年近くに及ぶ比較的長い期間をかけて徐々に日本は西洋とキリスト教に対して社会を鎖していった。便宜上の「……禁止令」ではなく、正式な「覚」とか「定」とかの「法令」が歴史的に時間をかけて徐々に総合的に外国との交渉の自由を狭め、最終的にオランダと中国、朝鮮との交際や貿易に限定する体制を構築した。その総称としての「鎖国」が私たちの今日的歴史概念となっている。

お春の「じゃがたらぶみ」

海外渡航と帰国の禁止、キリスト教禁令以前は、日本の商船が東南アジアに展開し活発に交易を行っていた。アジア各地に日本人町が建設され17世紀初め海外の日本人は5000人を超えていたという。ルソンには3000人以上がいた¹⁷。

この「令」によってジャワへ追放された混血の女性、おはる（1621 - 1701）の手紙「お春のじゃがたらぶみ」は故郷を懐かしむ切ない気持ちを伝えている。お春は、ケンペルが一時逗留したこの地にいまだ生きていたことであろう。

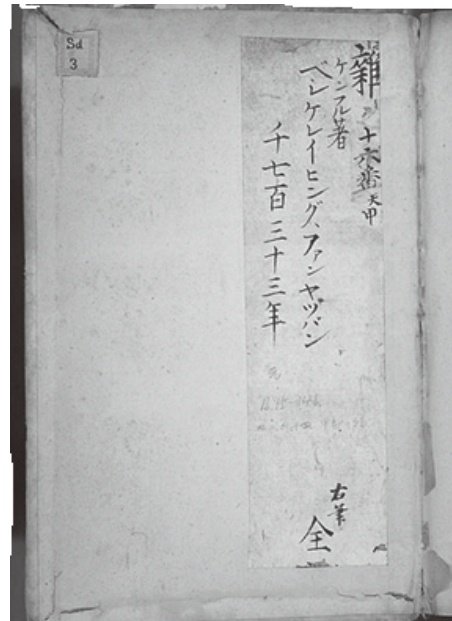
千はやふる神無月とよ、うらめしの嵐や。まだ宵の空も心もうちくもり、時雨とともにふる里を出しその日をかぎりとなし、又ふみも見じあし原の、浦路はるかにへだたれど、かよう心のおくれねば

おもひやるやまとの道のはるけきもゆめにまちかくこえぬ夜ぞなき

御ゆかしさのまま、腰おれかき付まいらせ候¹⁸。

この時期ポルトガルやスペインの宣教師たちがキリスト教の布教と貿易とを一体のものとして世界各地へ進出し、プロテスタントのイギリスとオランダがその後を追う形でヨーロッパ諸国のアジアでの覇権争いが展開する。この争いが徳川幕府の統治体制・権力基盤の確立と連動して、スペイ

ンとポルトガルの追放へ、イギリスの撤退に伴いオランダを唯一交易相手とする「鎖国」へと舵を切らせたと見ることができる。



（英語版のオランダ語訳『日本紀行』（1733）を底本とする日本語訳；同志社大学図書館蔵）

「鎖国論」が注目を浴びる

ケンペルの「鎖国論」が日本にいつ紹介され、だれに読まれたかの歴史的経緯や証言については小堀桂一郎氏の『鎖国の思想—ケンペルの世界史的使命』（1974）とクライナー（Joseph Kreiner）博士の『ケンペルとヨーロッパの日本観』（Kaempfer und das europäische Japanbild, 1996）にかなり詳細な研究が報告されている。また、2009年には大島明秀氏が志筑の「鎖国論」の翻訳とその転写本の系譜や種類について詳細な受容史研究『「鎖国」という言説』を公刊している。これら研究史から本論に必要と思われるところを紹介しよう。もちろん日本で読まれたケンペルの日本報告は、ショイヒツァー英語版『日本史』のオランダ語訳『日本紀行』である。

ケンペルの『廻国奇観』や『日本紀行』は、かなり早い時期から長崎や江戸で知られていた。『廻国奇観』については、若狭の蘭学者にして医師中川淳庵なかがわじゅんあんがスウェーデンのツェンベリ（Carl Peter Thunberg, 1743-1828）に安永七年（1778）と天明二年（1782）の二度にわたってその送付に対し江戸から礼状を出しているところを見ると、博物図鑑が関心を引いたのであろう。

平戸藩主松浦静山^{まつうらせいざん}が天明二年（1782）に『日本紀行』を購入したと、伝えられている。豊後の医師であった三浦梅園^{みうらばいえん}（1723-89）は日誌『帰山録・上』に門弟らと長崎への旅の途中、安永七年（1778）九月二五日通詞吉雄耕牛^{よしおこうぎゅう}のところで『日本紀行』を見た^よと記している。三浦梅園が見た『日本紀行』が、静山が購入したものかどうかはわからないが、通詞はオランダを介して日本に^よかんする海外情報蒐集の義務を負ったのであろうか。出島に移る以前、平戸にオランダ商館があった。平戸藩と通詞吉雄家や志筑家との間には交際があったことであろう。もちろん、忠雄がこの『日本紀行』を見たとか、翻訳の底本としたとかの記録はない。

ともあれ、1800年代に入るとヨーロッパの覇権争いがアジアにも及び、目に見えて外国船が日本に寄港することになった。1804年ロシアのレザーノフ（Nikolai Petrovich Rezanov, 1764-1807）使節団が乗船したナデシュダ（Nadeshda）号が長崎に入港する。1808年にはイギリス戦艦フェートン（HMS Phaeton）号がオランダ国旗を掲げ長崎港に入り、補給を要求する事件が発生する。

幕府天文方高橋景保が、幕府の命により文化五年（1808）ケンペルの『日本紀行』の「第四巻第五章」の「ポルトガル人およびスペイン人の日本到着、その処遇および貿易について」の部分訳を試みている。原題は「西客堅協鹿日本紀事第四編抄訳」（別名「蕃賊排擯訳説」）といった。幕府が鎖国に至る歴史に注目したのであろう。高橋はオランダ語ばかりではなく、世界情勢に通じていたから、翻訳が可能であった。歴史上の陰陽師のように、祭祀を司る者は西洋でいうところの物理学者であり、専門性もあって代々世襲であり、世界の動向を察知できる立場にあった。景保はシーボルト事件に関与した罪で獄死していることは意味深長である。

老中松平信明^{まつだいらのぶあき}（1763 - 1817）が文化四年（1807）と五年の二度にわたり平戸藩より『日本紀行』を借り受けている。長崎奉行近藤正斉も『日本紀行』を所有していたことが、彼の『銭録』の寛政七年（1795）のくだりから見てとれる。幕府は文化十一年（1814）に『日本紀行』二冊をオランダに注文している。それらは1729年と1733年のショイヒッター『日本史』のオランダ語版である。ま

た、大坂の町人学者山片蟠桃^{やまがたばんとう}（1748 - 1821）も江戸において7両で購入している。島津斉彬^{しまづなりあきら}（1809 - 1858）が嘉永四年（1851）に一冊、翌嘉永五年に一冊、六年に二冊、安政元年（1854）にも一冊、合計五冊購入している。

幕府は『日本紀行』を坪井信良に翻訳させ、それは明治一三年になってようやく『検夫爾日本誌一六巻』として完結する。この翻訳が注文した原本によるものか、また幕府の意図がどこにあったのか、恐らく外国での日本の位置付けにかんして「鎖国論」の内容が情報として必要であったのであろう。幕府の今後の外交政策をめぐってヨーロッパ人のものの考え方・情報が必要であったことだと推測できる。この時期、国家防衛上、あるいは国際情勢分析上、近代日本の行方を占う議論が開始された可能性をうかがわせる。

「鎖国は有益か否か」の論

オランダ語であれ、日本語訳であれ、「鎖国論」にふれた者は佐幕派に加担したのか、あるいは勤王派であろうか。あるいは「開国」派か、「鎖国・攘夷」派になったのか。ともあれ、関心をもった者、それぞれの主張がここに根拠をもったことは確かである。

蜜社の獄、すなわち反幕府運動のかどで処刑された渡辺崋山（1793 - 1841）は『客坐鐘掌記』と『全楽堂日録』^{ぜんらくどうにちろく}文政一三年（1830）一二月八日のくだりに『日本の紀行』のことを記している。

松平定信^{まつだいらさだのぶ}（1758 - 1829）は「秘録大要」（1808）で必読書として「鎖国論」に注意を促し、平田篤胤^{ひらたあつたね}（1776 - 1843）は『古道大意』^{こどう たいい}（文化八年・1811年）でケンペルを引用してこれを評価し、吉田松陰^{よしだしょういん}（1830 - 1859）も嘉永三年（1850）一〇月一日松浦でそれを見て、『西遊日記』^{さいゆうにっき}に記している。後に開国派となるが横井小楠^{よこいしょうなん}（1809 - 1896）は『読鎖国論』^{どくさ ことろん}でケンペルの「卓越之見」を紹介している。いずれも、ケンペルの鎖国擁護論を以て、西洋の日本観を自分たちに都合のよい論理で解釈し、いわばドームに反対し日本の鎖国政策の妥当性を無理やり誇示しているかのようである。世界情勢にいかに対応すべきか、が議論の段階を超えて決断の時期が迫っていた。

嘉永三年（1850）には国学者本居宣長の弟子黒

沢翁満が騒がしい世相を鎮めようと志筑訳「鎖国論」・「改題」として、『異人恐怖伝』上下二巻本を江戸で出版しようとしたが、叶わなかったことは前に触れた。

太田南畝^{おた なんぼ} (1749-1823) は『続鎖国論』(1805)でこう書き出している。「国鎖ざすべきか、すなわち、その用を通じて、その物を易うべからざるなり。国鎖ざすべからざるか、すなわち、その物を閉して、その彊をまもるべからざるなり。一啓一閉は治国の要なり¹⁹。」ここには、開国による植民地化の恐れ、鎖国による文明の遅れというジレンマがある。いずれにせよこの時代の日本の進路選択は思慮が必要であった。

近代の視点から見た鎖国

「鎖国」については、日本を世界から孤立させ文化と社会のあらゆる面で進歩発展を遅らせたというネガティブな見方と、一方、少なくとも幕府直轄の貿易相手国をオランダ、中国と朝鮮に限る政策が外国情報の適切な管理を可能にし、日本の平和を維持し、日本固有の文化や芸術、学問の深化発展・成熟を促したというポジティブな見方がある。前者は和辻哲郎(1889-1960)『鎖国—日本の悲劇』(1950)に代表される否定論であり、後者は、「鎖国」がなかったならば、日本はポルトガルあるいはスペイン、イギリスかも知れないが、それらの植民地になるかあるいは植民地に等しい外国領土を認めることになり、国家の滅亡を招くことになった、という幕末国学者たちの肯定論である。

ヨーロッパ近代の、すなわち文明圏史観によるステレオ・タイプのこれら二元論的「鎖国」評価については、わけても東アジアに力点を置いた対外関係史研究の進展と日本の当時の経済力、知的蓄積についての言説も含め多様な観点から総合的に検証が進んでいる。鎖国論は単に言説だけの問題で、実際の外交政策上重要な意味をもたなかったのであろうか。ヨーロッパは、これをいかに評価したのであるか。ケンペルが『廻国奇観』で論じた「鎖国」は現在から見ても相変わらず多様な論点を包摂している。

Ⅱ 「鎖国論」の読まれ方 —ヨーロッパ

18世紀後半のヨーロッパが蓄積していたアジアに関する知識と情報は一世紀前よりはるかに多く、比較対象としてのそれらは科学や学術分野においてヨーロッパの優越を証明するものばかりであった。ドームは、「鎖国」批判の前提として、アジアあるいは東アジアを一括りに、ヨーロッパとは全く異質な世界として載然と区別し認識している。この差別化は地誌と歴史を踏まえアジアをポジティブに理解しようという姿勢ではない。むしろヨーロッパの世界観の正当性を、アジアを反証材料として強調している。つまり、ドームは経験というよりも、18世紀ヨーロッパの啓蒙主義の合理主義的論理で17世紀日本を把握しようとした。ドイツ人カント(Immanuel Kant, 1724-1804)やヘルダー(Johann Gottfried von Herder, 1744-1803)、フランス人ディドロ(Denis Diderot, 1713-1784)やヴォルテール(Voltaire François-Marie Arouet, 1694-1778)らもケンペルの報告をもって日本をヨーロッパとの比較考察対象としている。

ドームの検証は、ケンペルの日本観の要約ともいえる「鎖国論」に向けられる。ドームはこれを見過ごしにはできないと考え、「編者のあとがき」として「是正を要する点」をケンペルの所論四項目に対応させるかたちで添えた。ドームによれば、ケンペルの「鎖国論」は、ヨーロッパ人の好奇心を満足させるため「自分が見て来た国を他に勝って特別に珍しくかつ立派な国に仕上げたい」衝動にあったかに見えた。

ケンペルから約80年近く時代が下るドームは、いわばサイド(Edward W. Said, 1935-2003)がいうところの「オリエンタリズム」(Orientalism, 1978)の視座で啓蒙主義の普遍主義を尺度として東アジアや日本を停滞地域と見なし、日本にかんしその原因を「鎖国」に帰した。ケンペルの鎖国肯定論とは正反対に近い見解がここに見てとられる。

ともあれ、鎖国が「停滞」と「弊害」もたらすとのドームの見解を聞こう。

ドームの「あとがき」

ケンペルは五項目にわたり鎖国の正当性を主張したが、ドームはこれへの反論を四項目において

企てている。

一「日本は技術や学問の点で、他のあらゆる諸国より優れている」との所論。

われわれの進歩がはじまったとき彼らは停止し、ヨーロッパ人がとうに超え出た水準に彼らは依然として停滞している……中国の聖賢の教えは現世的に過ぎる……医学は経験知であり、原因分析が欠けている……政治や裁判は専制的……他宗教への寛大さは認めるが高踏的に過ぎる……技術はアジアにおいては少しも進歩を遂げず開発されたばかりの水準にいつまでもとどまっている²⁰。

二「日本国民は最後の革命以来、極めて幸福な状態におかれている」との所論。

幕府将軍の権力は絶大で、諸大名は不幸を我慢し、一般庶民は警察国家に等しい社会に生きている。……日本人が簡単に死ぬのは、勇気ではなく不幸な生活のためである……太閤の革命以来、行動の自由がなくなり、警察国家と成り下がってしまった²¹。

三「日本の歴史には勇気と沈着を示す物語がたくさんあり、ムチオス (Mutios)、スケフォラス (Scaevolus)、ホラチエル (Horatier) 等*の勇将に匹敵する日本の英雄がたくさんいる」との所論。
(*古代ローマ帝国の英雄たちのこと)

ケンペルによる日本の歴史記述は無味乾燥であり……アジアの歴史から何も期待できない。英雄の名前は違っても行動は同じである……アジア人のどんな勇壮な行為にも常にある種の偉大さが欠如している。つまり、それが祖国のため、現実の自由のためあるいは彼らが奉じた自由のためになした行為ではないということである。……アジアの歴史からは決して重要な教訓を期待できない。……アジアからは何ら学ぶところはない²²。

四「日本はあらゆる外国人の渡来を禁じ、日本人

の外国旅行を禁じたが、この日本国の鎖国はただしく、政治的に有利である」との所論。

このような政策をとる理由は何であるかが重要である。世界の他の諸国における迫害よりも正当な理由があった。……

「日本は自給自足できる国であり、鎖国政策は不自然ではない」というケンペルの主張は正しいように思われる。

……しかし、全ての他国の人と仇敵のように隔絶させられているということは、この国民にとって一大不幸である……かれらはこのようにして不自然に行く手を閉鎖され、文明開化へ進むことができず、嗜好の幅を広げることもできず、鎖国をしていなかった時のように物産を拡充したり、加工したりすることができない。……日本人の精神は、長い期間の禁囚によって、ますます狭い単形の萎びたものになり、永遠のお手本もなく、競争相手もなく、刺激もないものになってしまうであろう²³。

進歩のヨーロッパと停滞のアジアとの位置づけによる優劣は、社会制度や技術的進歩という物質的部分ばかりではなく、人間精神や知的訓練にまで及ぶという考えがここに示されている。

日本の「近代化」が、ヨーロッパ近代が生み出した制度や技術、思想を学んだことによって成就されたと考えれば、ドームの反証はむしろ正しい。18世紀後半の啓蒙主義時代に、ユダヤ人擁護の書『ユダヤ人の市民としての権利の向上について』(Über die bürgerliche Verbesserung der Juden, 1783)を著わしたプロイセンの官吏ドームの行動と思想は、人間の精神活動と行動の自由の上に保障されるものであり、彼の鎖国批判とアジア批判にはいささかの矛盾も存在しない。

ドームの分析

ドームは一方、ケンペルの旅が理論と実際の証明のそれであり、時代の知的対象の研究実践であったことを確かに認めている。

ケンペルはある一つの研究に的を絞らず、あ

る定まった生活態度をとることを好まなかった。彼の意図は知識を広めて直観力を養い、思考の範囲を拡大して、書物から学んだらそれを自然に人間にあてはめて研究する。……この性向が彼をすでに若い時代に祖国を後にし、次から次へと場所を変えて旅を続けさせることになった。学問を究めるために学問をするのではなく、また小さな巧妙をたてるために学問をして、学問を生活の糧とするような一般人の考え方とは全く別のものであった

²⁴。

ケンペルの知識欲はあらゆる方面へ向けられた。旅行の途中においてもアジアの宗教や哲学の諸体系の沿革、歴史、自然、芸術、技術、法律、動植物、医学に関する彼の研究心は申し分なく発揮された。ドームはケンペルの報告を一般に是としている。

しかし、啓蒙主義者ドームから見てケンペルの観察と報告は批判と検証とを欠いていた。このことは、日本の歴史記述についてのドームとケンペルの見方の違いによく見てとることができる。

歴史はケンペルの最も得意とする専門分野のように思われる。……習い覚えたばかりのことばで書かれ、無味乾燥なうんざりするような不合理な記述が多い日本の年代記を丹念に読み、その抜粋を記述させた。そして、ケンペルはなんら功を誇る様子もなく淡々としてシャムと日本の政治制度の発展を正確に叙述し……²⁵

この場合、東洋の年代記としてわれわれに与えられている史料に、果たしてどれほどの価値があるか、というような重要な批判的疑問が提起されることはあまり期待できないであろう。その年代記の筆者はだれか、それはいつの時代に書かれたのか、この時代について、他に誰が、どんな年代記を書いたか、この年代記と紹介のそれとの間にはどんな違いがあるのか等々、これらは古代のアジアの史書を読む場合に出てくる疑問であり……²⁶

啓蒙主義者ドームには、日本の天照大神から始まる『古事記』の歴史記述は事実というよりも物語であって不合理極まりないものと映った。観察者ケンペルの正確さについては称賛したが、その記述方法がただの写しで無批判的である点を、まさに歴史批判的視点の欠如を批判している。

ケンペルが書いた太閤秀吉伝については、秀吉を革命家、つまり社会改革者とみなしているところが興味深い。つまり、農民の出自で専制者となったため、人々の日常生活に通じた為政者と理解したのであろうか。一方、ドームは、秀吉が日本を絶対主義国家として確立し、我が意を実現する権力政治家・専制主義者であると批判している。事実、秀吉は農民の利益の代弁者でも、農民のための政治を実践した訳ではなかった。

ドームの人となり

プロイセンの官吏ドームは七年戦争の5年前1751年に生まれ、ウィーン会議の5年後1820年に没している。ケンペルより丁度100年時代が下る。プロイセン王国の首都ベルリンでは人口が1700年頃の10万人から1800年頃には19万人にまで増加した。そして、フリードリヒ二世の東方への植民政策が示すように、官僚や外交官として招聘者あるいは志願者を必要とした。

ドームもプロイセン王国の官吏となった一人である。ライプツィヒ大学で神学を修め、その後ゲッティンゲン大学に移り哲学、歴史、政治学を学び、わけでもキリスト教の非ドグマ的観念を研究することによって啓蒙主義神学に傾倒する。ユダヤ教への関心とユダヤ人の市民的権利保障の考えはここに淵源を有する。

ドームはヨーロッパ啓蒙主義の展開の只中に生きた。彼が『ユダヤ人の市民としての権利の向上について』を著わし、ユダヤ人にドイツ人と同等の市民的権利を付与し義務を課そうとした思想には、啓蒙主義の国家と宗教にかかわる理念が大きく反映している。

一方、ドームは、ユダヤ人社会の閉鎖性を批判対象とした。この姿勢と「ケンペルの鎖国論」批判の論拠は根を一つとするものではなからうか。

鎖国とユダヤ人コミュニティ

ドームがユダヤ人にドイツ市民と同等の権利を与え、義務の履行を求めた思想には、ともに「鎖ざされた国」日本と「ユダヤ人コミュニティ」との相似が見てとられる。

ドームにとって、日本もユダヤ人社会も、外からの情報と知識を意図的に遮断することによって進歩への道を閉ざしているように見えた。ドイツ人社会とキリスト教徒の、非抑圧的民族ユダヤ人に対する姿勢は確かに法的にも道徳的にも、また国家利益においても不当であった。しかし、長く、キリスト教徒ドイツ人社会の隙間を埋める仕事を強いられてきたユダヤ人にとって、ドイツ人との間には精神的物質的に越えがたい壁が存在していた。しかし、この壁は宗教的寛容によって内と外から、一方、社会制度として生業等の自由を保障することによって、溶融されるはずのものであった。

この分析から、ドームは日本の鎖国についても永遠に継続することは不可能との見方を示している。つまり、言説あるいは思想としての「鎖国」は存続しても、実際の制度としてそれは存在し得ないこと、外からではなく内からのみ妥当している「定」に過ぎないことをドームは鋭く看破していた。

19世紀における西欧諸国のアジアに対する帝国主義的侵略の歴史が証明するように、外部から強制的に武力をもって鎖国が解かれる可能性をドームは予見していた。日本については、特にロシアの脅威を指摘している。

日本が再び開国して圧制制度が崩壊するということは、日本人にとっても外国人にとっても非常に緊要なことであるが、革命があっても勝った党派は、いずれも外国人を寄せ付けない方策をとるだろうから、それは国内の革命に期待する術もない。そして、外部からは、この不自然な鎖国日本に対して開国を迫る国はまずあるまい。ただロシアは地理的にも日本に近く、その強大な国勢を恃んで、日本への接触を図るかも知れない。

うな結びつきができることを不可能でないと考えており、1764年にイルクーツクに日本航海学校を創設した事実は、それを証明するようである……²⁷

翻って日本では、江戸時代末期に外国船が日本近海に頻繁に出没するようになって以来、鎖国にかんし為政者や知識人の注目を引く。それは外交政策において攘夷思想に後押しされた鎖国維持によって国家が存続し得るか。あるいは幾つかの港を外国船のために開放することによって国際社会に国家としての存在を認知させることができるか。とりもなおさず欧米諸国と外交・通商関係をいかに構築するか。ひいては国際社会における日本の将来の国家の在り方とも関係するものであった。

開国は、ドームがユダヤ人に義務を課し権利を保障することにより、ユダヤ人社会をドイツ人社会に有益なものとして位置づけようとした理念と同じ思想課題上にあったといえよう。

進歩の思想

キリスト教の聖書ではアダムとイヴの原罪以前は自然状態が存在していた。エデンの園の自然と近代の自然との間の相違は人間が理性を通して自然を合理的に認識した結果に依る。人間が本来自由であり、平等であるという自然権の思想は、この合理主義に由来し、現実の社会と国家組織、宗教と教会権力との間の在り方とも関連する。近代の人間は実定法によって「他人が望むことをなせ」の自然の理を強制されることになり、18世紀には、この自然の理は生来の人間の諸権利の法理念として働いた。

一方、ドームから見ると、鎖国日本は近代以前の自然状態にあり、日本社会はヨーロッパ社会への進化の途上にあった。

東アジアの諸国民はいたって原始的で、人間の生命と悟性とを美しき自然に託しておくという原始のおおらかで健康な観念の段階にとどまっている²⁸。

エカテリーナ二世は、将来東西間にこのよ

人間は国家あるいは社会において自分たちに相

応しい権利を有し、義務を負い、幸福を享受できる。階級的分化は人間の能力の結果次第であり、社会の枠組みにおいて果たすべき政治経済的役割は素性によって決定されるのではなく、社会と人間個人との関係に従い後天的に形成される。これが普遍的真理である。

日本の江戸時代の武士を頂点とする士農工商の身分制度は、生来の素性に基づくものであって、確かに現実においては職業上の名称にすぎなかったとはいえ、人間の自然権を否定するものとドームには見えた。

アジア民族の哲学、物理、数学は学問というに値しない。孔子がどんなに偉い学者であったにしても、初めて天与の道德を説いたといわれているソクラテスの名声が失墜するものではない。このシナの聖賢の教えは、徳をもってはじまり、その点でソクラテスの哲学と一脈相通ずるところがあるとはいえ、余りに現世的であり、政治論に偏り過ぎている²⁹。

ケンペルが日本の「鎖国」政策に見た理想の「仁政」の国家理念、ライブニッツが中国の儒教のうちに洞察した法治以前の礼儀や人間の内面の倫理性の陶冶を重視する国家理念は、社会道德、世俗の段階にとどまり、法理念にまでは至っていない。18世紀ヨーロッパにとって、この国家理念は過去の「遺物」であった。この意味で、啓蒙主義者ドームの「鎖国」批判は、ケンペルとの間の思考形式の相違、いわば啓蒙主義の合理主義を介した新旧論争であったといえることができる。

ドーム対ケンペル

江戸幕府の「鎖国」の適否をめぐるケンペルとドームの評価の違いは、両者を分つ時代の思考形式と方法の変化にあった。

ケンペルは科学者ではあったが、近代の分析的科学者ではなく、また探検家でも哲学者でもなく、実際に体験した多様な世界や民族、習俗について、むしろ観察による知的探求者であり、ある尺度をもって事物を評価する姿勢はもたなかった。日本にかんしていえば、まず現実世界の情報や事物、これまでの知識や体験では測れないものを幅

広く深く蒐集すること、そしてそれらをヨーロッパ・ドイツとの相対的比較の視点をもって記録に留め、蒐集物を可能ならば持ち帰ることにあった。

つまり、ケンペルの日本報告が有する特徴は、ヨーロッパ・ドイツとの比較相対化に留まっていた。その比較は優劣を記すのではなく、客観的観察の結果に基づき「あるものとなないもの」あるいは「違いは違いとして」事実を記録するという方法である。この方法は、宣教師でも商人でもない、いわば利害と無関係の観察者としてのケンペルの姿勢の現れであった。

一方、18世紀の啓蒙主義者にして、プロイセン・ベルリンの官吏ドームによるケンペル批判の根拠は、ヨーロッパの理性中心の合理主義や進歩を基準とする批判精神にあった。ドームの分析によれば、ケンペルの報告「日本は完全な鎖国制度がとられている現在ほど幸福な時期をみいだすことはできないであろう³⁰」は表面的観察であって、まさに現実にはあり得ない理想的ユートピアの世界をたまたま発見した、としか言えない。「あるとき彼はそのユートピアを発見した。だが、われわれは彼のその判断に頼るべきではない」と。ドームの懐疑は、綱吉の絶対的権力と幕府の統治機構によって安定し繁栄しているかに見えた江戸元禄の政治背景にあった。啓蒙主義者ドームにとって、人間の権利を保証する政治体制は、人間個人の能力と精神の自律性により保証されなければならなかった。

むすびにかえて

ケンペルの「日本」が、18世紀ヨーロッパに新たな日本観の形成を促した訳ではない。ショイヒツァーやドームが編纂したケンペルの「日本報告」の受容には、ヨーロッパの時代精神とその恣意性が反映することになった。宗教としてのキリスト教ドグマであるところの倫理や神への帰依、高潔な生活や魂の安寧への願い、贖罪や永遠の平和を希求する精神は、異教徒としての日本人のそれとは一致するものではなかった。従って、彼らが日本は無神論者の支配する混乱と無秩序状態であると見たとしても、けだし当然であった。

ケンペルは、神道と仏教をヨーロッパの宗教に、儒教をギリシア・ローマ古典哲学に対応させる形

で、日本と日本人をポジティブに論じた。このことは、少なからずヨーロッパへ衝撃をもたらした。しかし、啓蒙主義時代の比較対象としてのポジティブな評価の方向ではなく、むしろネガティブな反証材料となった。国家安泰の要因の一つとして、ケンペルが強調した日本の「鎖国」政策は、むしろヨーロッパ人にとって自分たちの国家の歴史と在り方の正統性を証明する根拠となった。客観的かつ系統的観察の集成であるケンペルの『廻国奇観』と『日本史』あるいは『日本の歴史と紀行』は、逆に 18 世紀ヨーロッパ啓蒙主義の合理主義の普遍主義を補完する材料となったのである。

テキストは次の二つによる。

Christian Wilhelm von Dohm: Engelbert Kämpfers Geschichte und Beschreibung von Japan. Aus den Originalhandschriften des Verfassers, hrsg.v.Christian Wilhelm Dohm. Erster Band. Lemgo. 1777. Zweiter und letzter Band. Lemgo, 1779.

Engelbert Kaempfer : Werke. Kritische Ausgabe in Einzelbänden. Herg. v. Detlef Haberland, Wolfgang Michel, Elisabeth Gössmann. München 2003.
Heutiges Japan ,1/1, 1/2. Hrsg. Von Wolfgang Michel und Barend J.Terwiel.

- ¹ 五之治昌比呂「ラテン語で読むケンペル「鎖国論」——『廻国奇観』所収論文とその翻訳について」西洋古典論集 22, 260-278, (2010、京都大学) 参照。
- ² 大島明秀『鎖国という言葉 ケンペル著・志筑忠雄訳「鎖国論」の受容史』。2009 年、京都。写本の数等も含め「鎖国論」の流布にかんする詳細な研究書である。
- ³ 以下の六篇である。「日本における製紙法」、「もっともな理由のある日本の鎖国」、「鍼術による疝気治療」、「シナおよび日本の艾灸」、「竜涎香について」、「日本の茶の話」
- ⁴ Reinhard Zöllner Verschlussen wider Wissen – was Japan von Kaempfer über sich lernte. S.185.
- ⁵ Bodart-Baily: Kaempfers Japan Tokugawa Culture Observed, by Engelbert Kaempfer. Edited, translated, and annotated by Beatrice M.Bodart-Baily. 1999.
- ⁶ 「少年必読日本文庫 第五篇」(明治 24 年 博文館、鎖国論卷之上) 7 頁。
- ⁷ 五之治昌比呂、前掲書。
- ⁸ 『日本国粹全書刊行会』(大正 6 年 8 月) 116 - 117 頁。
- ⁹ Christian Wilhelm von Dohm: Zweiter und letzter Band. Lemgo, 1779. S.396.
- ¹⁰ Ebenda., S.397.
- ¹¹ Ebenda., S.404.
- ¹² Ebenda., S.410f.
- ¹³ Ebenda., S.414.
- ¹⁴ 「日本史料集成」(平凡社、昭和 31 年) 343 頁。
- ¹⁵ Verschlussen wider Wissen-Was Japan von Kaempfer über sich lernte, Engelbert Kaempfer(1651-1716) und die kulturelle Begegnung zwischen Europa und Asien,

S.Lippische Studien. Bd.18,208)

- ¹⁶ 岩生成一『朱印船と日本町』(昭和 37 年)、99 - 100 頁。「日本史料集成」、前掲書、342 頁。
- ¹⁷ 岩生成一、前掲書、113.
- ¹⁸ 「日本史料集成」、前掲書、342-43 頁。
- ¹⁹ 鈴木圭介「写本の運命」ケンペル『鎖国論』の書誌学、1998.
- ²⁰ Christian Wilhelm von Dohm.,a.a.O., S.416f.
- ²¹ Ebenda., S.418.
- ²² Ebenda., S.420.
- ²³ Ebenda., S.422.
- ²⁴ Ebenda., Einleitung des Herausgebers, S.XVII.
- ²⁵ Ebenda., Einleitung des Herausgebers, S.XXXII.
- ²⁶ Ebenda., S.420.
- ²⁷ Ebenda., S.422.
- ²⁸ Ebenda.
- ²⁹ Ebenda.,S.416.
- ³⁰ Ebenda.,S.414.

Kaempfers lateinische Abhandlung „Regnum Japoniae.....“ und modernes Japan

WATANABE Naoki

Zusammenfassung

Hier geht es um die Japan-Auffassung der europäischen Aufklärungszeit im 18. Jahrhundert und sie spiegelt sich am klarsten in der beiden deutschen Meinungsverschiedenheit der Beurteilung von der „Isolutionspolitik“ der Edo-Periode Japans. Kämpfer, der Ende des 17. Jahrhundert in Japan zwei Jahre geblieben war, schätzte die Politik positiv, dagegen stand Dohm, der der aufgeklärter Beamte im absoluten Staat Preußen war, der Politik negativ gegenüber.

Es ist überzeugt, dass es zwischen den beiden Meinungen eine erhebliche Diskrepanz gibt. Dohm war typischer Aufklärer in Europa und stand im Mittelpunkt des aufgeklärten Zeitalter. In politischer wie in anthropologischer Hinsicht konnte der europäische Rationalismus bei ihm im Gegensatz zum asiatischen Voluntarismus auch den Vorrang der Vernunft vor dem Willen bedeuten. Demgegenüber beruht die wissenschaftliche Großleistung von Kämpfer auf der universalen Ausbildung, die viele der zu sener Zeit noch nicht breit ausgefächerten Disziplinen umspannte. Kämpfers vielfältige Gesichtspunkte ermöglichten der Isolutionspolitik in der damaligen Zeit Japans einen positiven Wert beizulegen.

In diesem Aufsatz lässt sich der Sinn der „Isolutionspolitik“ nicht nur in der europäischen Geistesgeschichte, sondern auch in der japanischen Geistesgeschichte aus dem Unterschied der Meinungen zwischen Dohm und Kämpfer erklären.

(2014 年 10 月 31 日受理)